

第十五回南のシナリオ大賞

優秀賞

おいしいへたくソ事件

竹上雄介

「おいしいへたくソ事件」あらすじ

ある日の食事中、一紀(30)は妻・莉子

(30)に怒られた。「ご飯おいしい？」と聞か

れて「おいしい」と答えた一紀の「おいしい」

がへたくソだったからだ。一紀は本当に「おい

しい」と思っているが、莉子は「へたくソ」の

一点張り。なぜ莉子があんなことを言い出し

たのか、一紀は全くわからない。

莉子の怒りは収まらず、家から追い出され

る一紀。立ち寄ったラーメン屋では「ごちそ

うさま」を言わなかったせいで店主から怒ら

れる始末。「そういう一言、大事だぞ」と。

その言葉に思い当たる節があった一紀。毎

日家事をしてくれる莉子に対し、「おいしい」

だけでなく「ごちそうさま」や「ありがとう」の

一言を言っていただろうか。へたくソと言

張るのは、普段そういうことを言わない俺へ

のメッセージだとしたら……。夫婦だからこ

そ忘れてはいけない大事なことに気付いた一

紀は、もう一度莉子のもとへ向かう。

一紀M「それは突然のことだった」

カチャカチャとご飯を食べる音。

莉子「ねえ、ご飯おいしい？」

一紀「え？ なんで」

莉子「いいから、おいしい？」

一紀「うん、おいしいよ」

莉子「へタ」

一紀「なにが？」

莉子「へたくソ」

一紀M「どうやら俺の言う「おいしい」がへタ

クソだったらしい。次の日もその次の日も

莉子は執拗に聞いてくる」

莉子「おいしい？」

一紀「おいしいよ」

莉子「へたくソ」

一紀「へタってなんだよ」

登場人物

一紀(30)

莉子(30)

同僚(30)

ラーメン屋の店主(45)

莉子「マズいならマズいって言ってよ」

一紀「だからおいしいって」

莉子「ヘタクソ」

一紀M「結婚してから3年、料理がマズいなんで一度も言ったことはない。それに俺は本当においしいと思っっている。なのに」

莉子「ヘタクソ」

一紀M「意味がわからない」

莉子「博多行ったとき、ラーメン食べたじゃん？」

一紀「うん」

莉子「あの時はもつとおいしい顔してた」

一紀「そりゃおいしかったから」

莉子「ほら、今はそんなってことじゃん」

一紀「そうじゃなくて」

莉子「あの時みたい言ってよ」

一紀「おいしい！」

莉子「ヘタクソ！」

一紀M「確かに最近の莉子はどこか機嫌が悪かった。けどまさかこんなことでずっと怒っていたとは……とにかく次はもつと元気な声で言ってみよう」

カチャカチャとご飯を食べる音。

一紀「おいしい！」

莉子「ヘタクソ」

一紀M「次はダンディな声で」

一紀「おいしい」

莉子「ふざけてんの？」

一紀M「次は仕事終わりの1杯をイメージ」

一紀「くっく、うっめえ〜」

莉子「もういい」

一紀M「俺が何か気に障るようなことでもしたのか？ 理由を聞いてみよう。しかし次の日、莉子は風邪で寝込んでしまった」

一紀「大丈夫？ お粥作っただけど食べる？」

莉子「うん」

カチャカチャとお粥を食べる音。

一紀「お粥、どう？」

莉子「うん」

一紀M「うんって、お前はおいしいすら言わないじゃないか！」

莉子「今さ、お前はおいしいすら言わないじゃないかって思った？」

一紀M「怖い。心の声が聞こえている……負

けるな俺！」

の玄関に戻ってきた」

一紀「だって俺はちゃんとおいしいって言っ

てるし……」

ピンポーンとインターホンを鳴らす。

一紀「それは私がおいしい？つて聞いてから

のおいしいでしょ？ それはおいしいに入

らないから」

一紀「はい」

一紀M「俺は一体なにで怒られているんだ」

一紀「なんもしてねえよ、浮気も借金も」

同僚「余計喧嘩になるぞ」

一紀「俺だけど……一回話し合わないか？」

一紀「なにで怒られてるかわからないの？」

同僚「とりあえずちゃんと話し合えつて、はい

カギ開けてくれよ」

一紀M「ダメだ、強すぎる」

一紀「え、もう？」

一紀M「もうはつきり言ってくれよ……俺も

一紀「だから怖いんだよ」

同僚「どういふのは早く解決しないと、いつ

我慢の限界だ」

一紀「だから怖いんだよ」

同僚「とりあえずちゃんと話し合えつて、はい

ガシヤツとインターホンが切れる。

解散！」

一紀「え、もう？」

一紀M「もうはつきり言ってくれよ……俺も

一紀M「俺は家を追い出された」

同僚「どういふのは早く解決しないと、いつ

我慢の限界だ」

の間にか他の男作って出て行かれるぞ」

ピンポーンとインターホンを鳴らす。

一紀M「たった一杯で店を後にした俺は、家

莉子「はい」

お腹が鳴る音。

ラーメンいっちょよ！」

一紀「あのさ、言いたいことがあるならばつきり言ってくれよ」

一紀M「腹は減る。どうしよう……と、家の近くにラーメン屋の屋台を見つけた」

店主「なに、そんな溜め息して」

莉子「だから言ってるじゃん、おいしいがヘタクソだって」

一紀「すみません、やってますか」

一紀M「あなたのテンションについていける

一紀「他になんかあるんだろ」

店主「いや、最近は全然だよ」

元気がないんです、って言う元気もない」

莉子「さあどうでしょ」

一紀「え？」

店主「その顔は喧嘩だな、奥さんと。男って辛いよなあ」

莉子「いや、なにもしてないよ。なんにも」

店主「カミさんは相手してくれないし、そういう店も行っていないからなあ」

辛いよなあ」

一紀「じゃあなんで怒ってるんだよ」

一紀「はい？」

一紀M「前言撤回。このおっさんなら俺の悩みを解決してくれるかも？」

莉子「なんでだろうね……とにかくもつと最

高のおいしいを私に献上して」

一紀M「前言撤回。このおっさんなら俺の悩みを解決してくれるかも？」

高のおいしいを私に献上して」

店主「ああ、こつちのことじゃなくて？」

みを解決してくれるかも？」

ガシャツとインターホンが切れる。

一紀M「そう言って下品に腰を振りながらガハハと笑うおっさん、どうやら面倒臭そう

店主「で、ちゃんと謝ったのか？」

一紀M「こんな理不尽なことを言われるのが

夫の役目なのか……もういい、こつちから

一紀「え？」

店主「他の女とやっちゃったんだろ？」

夫の役目なのか……もういい、こつちから

一紀「店がやってますか、という意味で」

一紀「違いますよ、俺は何も……」

お願い下げだ。二度とあんなヤツのメシなん

店主「わかってるよ、ほら座って座って。えつ

店主「はい、ラーメン出来上がり！ 食べて

か食うか！ と言っても」

と醤油ラーメンでいいね？ はい醤油

元気出せい！」

一紀M「とにかく食べよう、その後考えよう
……俺は一心不乱にラーメンをすすった」

ラーメンをすすする音。

一紀「おいしい……おいしいです」

店主「あつたりめえだ」

一紀「本当においしいです、おいしい」

店主「そんなにおいしいって言わなくても」

一紀「今日は言わせてください」

店主「はあ？」

一紀M「気付いたら俺は全てを話していた」

店主の笑い声。

店主「なんだよ、そんなことかよ」

一紀「それが本気で悩んでて」

店主「ただの痴話喧嘩、イチヤイチヤ話じゃ

ねえか。新しいプレイか？」

一紀「違いますって。向こうは本気で怒って
て、どうしたらいいか……」

店主「でも懐かしいなあ」

一紀「え？」

店主「いやーさ、俺も昔同じようなことが

あつてよ……奥さんから急に、最近かわい

いって言うてくれないよねって、めちゃく

ちやに責められてさ」

一紀「へえ……」

店主「まあそんなこと突然言い出すのが女

心つてヤツだ。男にはわからねえよな」

一紀「女心……結局どうやって仲直りを？」

店主「そんなの一つしかねえだろうよ」

一紀「え？」

店主「チョメチョメよ」

一紀「チョメチョメ？」

店主「夜な夜な抱きしめながら、かわいいか

わいって」

一紀M「じゃあ俺は夜な夜な抱きしめながら

おいしいおいしいって言えばいいのか？
いや違う違う。変態になつてしまう」

店主「だから兄ちゃんも今日は早く帰って

しつかり決めてこい」

一紀「決めてこいって……」

店主「よし、帰った帰った。ラーメン下げる

ぞ」

一紀「いやまだ食べてる途中……」

店主「すっぽんラーメンにすりゃ良かった

なあ……でも兄ちゃんは大丈夫か」

一紀「はい？」

店主「まだまだあつちのほうは元気そうだも

んなガハハ」

一紀M「ダメだ。こんな店いち早く出よう。俺

はすぐにお金を払って店を出た」

店主「ちよつと兄ちゃん、ごちそうさまは」

一紀「え？」

店主「食べ終わったらごちそうさま 基本だろ
そういう一言、大事だぞ」

一紀M「なんでこんな変態野郎に怒られない
といけないんだ。お前が途中で下げたりし
なきゃ、ごちそうさまくらい普通に……」

風が吹く音。

一紀M「言っていただろうか。ごちそうさま
……俺は莉子にごちそうさまと言ってい
たか。掃除や洗濯をしてくれたことに対し
て、ありがとうは言っていたか」

莉子の声「いや、なにもしてないよ。なんに
も」

一紀M「俺は浮気も借金もしていない。けど
そういうこともしていなかったのではない
か。へたくソと言い張るのは、普段おいし

いを言わない俺へのメッセーじだとしたら
……俺はもう一度家へ向かった」

ピンポンとインターホンを鳴らす。

莉子「はい」

一紀「ただいま……俺さ、いつも仕事から
帰っても、ただいまって言ってなかったよ
ね」

莉子「え？」

一紀「ありがとうも、ごちそうさまも、おやす
みも、おいしいも」

莉子「……うん」

一紀「そういう一言、言ってなかったからへ
たくソになったんだね……ごめん、これか
らはちゃんと言う。だから……」

莉子「おかえり」

ガチャッとカギが開く。

おわり